

## 〔国際会議発表〕

発表研究者	東京工業大学大学院 博士後期課程 田島 大輔	2162107
参加会議	Object Perception, Attention, and Memory	
出張期間	2016年11月17日～11月22日	
開催場所	ボストン USA	
発表論文	Visual search for hand-like biological motion stimuli 手指の biological motion 刺激への視覚探索	

## 概 要：

アメリカのボストンで開催された The 24th Annual workshop on Object Perception, Attention, and Memory に参加した。投稿数 100 件，参加者 300 名程度の学会ではあるが，北米地域の認知科学や知覚科学の学会としては比較的大規模な Psychonomic Society 2016 Annual Meeting のサテライト集会であるため，同分野の若手が多く参加する学会である。そのため認知や知覚関連の活発な議論が行える学会である。発表では，複数の動作する視覚オブジェクトの中から，自分の身体動作と同期して動作するものを探索することは，自分では容易だが，他者には困難である現象（小林 & 葎田，2014）に対して，ヒトの身体形状という視覚的文脈は影響するのかを報告した。具体的には，被験者の右手の動きに同期して動作する視覚オブジェクトの探索時に，視覚オブジェクトの形状が被験者の右手のバイオリジカルモーション刺激である場合に，探索が容易になるか検討した。また対照実験として，被験者の手の動きに追従するオブジェクトの形状をランダムドットに置き換えた実験も同時に行った。探索の難易度の調整を行うため，探索刺激と身体動作の間に時間遅れを段階的に導入した。結果，どちらの視覚オブジェクトの形状でも，250 ms までの遅延では正答率は 90% と高く，遅延が 400 ms 以降ではチャンスレベル（50%）と同等の正答率となり，自らの身体運動と同期する視覚オブジェクトを探索する場合，視覚オブジェクトのヒトの身体形状の文脈は影響しないことを示した。この示唆に対し，学会では指を動かすような細かい手の動きでは結果が異なるのではないかという議論が行われ，注意を向ける身体運動の種類によって探索の難易度が変わる，即ち，どのような身体動作に対して注意を向けるべきかの事前の文脈により，探索の難度や自己身体認知が変容する着想に至ることができた。